

奈良市における庭園の悉皆的調査

遺跡整備研究室では、2012年より奈良市の文化財課との連携研究として、奈良市における庭園の悉皆的調査を実施しています。調査の目的は、名勝庭園以外に、奈良市内に残る歴史的な庭園を調査し、その数と現況を把握するとともに、文化財指定・登録等の保護施策のための基礎資料を作成することです。

奈良市に残る庭園の中でも、森蘊(1905-1988)が昭和期に作った庭は特筆に値するでしょう。奈良文化財研究所の発足の1952年より15年勤めた森は、日本庭園史研究の基盤を築いたとして高く評価されていますが、じつは、社寺や民間、公園や宿泊施設等、全国60数件の庭園の作庭家としても活躍していました。

中でも、岩井邸庭園(1970年)は森にとってまったく新しい挑戦でした。それまで唐招提寺や法華寺等、古建築の庭園を設計していましたが、岩井邸では打放しコンクリートの住居に作庭を試みたのです。

門から玄関まで湾曲する石畳の横に、約7tの生駒産の巨石を2つ深く埋め、その周りに室生産の栗石と苔を敷くことによって深山幽邃の雰囲気を作りました。家に近づくにつれ、建築にあわせた幾何学的な切り石のデザインへと変わっていきます。いわば、自然と人工の調和を計った構成です。

しかし、庭は生き物であり、管理する職人によって、また施主が世代交代することによって大きく変化したり、消滅したりすることも少なくありません。岩井邸庭園も例外ではなく、90歳を超える現所有者が維持管理してきた思いにどのように寄り添い、森の庭園を残していけるかという問題に直面しつつあります。このように奈良市内に残っている古代の庭のみならず、近現代の庭の現況を把握・記録した上で評価をしていくことも緊急の課題となっています。

(文化遺産部 エマニュエル・マレス)



岩井邸庭園(2013年撮影)

保存科学研究集会の開催

保存科学研究集会は、文化財の保存にかかわる全国の文化財担当者が、保存科学に関する様々な問題について情報共有と意見交換をする場として毎年開催されています。昨年度は「文化財調査におけるイメージング技術の諸問題」と題して2017年3月に平城宮跡資料館において開催し、計115人の参加がありました。

文化財におけるイメージング技術は、錆に覆われた遺物の内部を可視化するX線ラジオグラフィや、肉眼では確認できない墨書を可視化する赤外線リフレクトグラフィ等の技術に始まり、近年では化学分析の結果を2次元的に表示するマッピング技術や膨大な点群データを用いて3次元イメージを構成する技術、文化財の内部構造を3次元的に把握するX線CT等の技術が急速に発展しています。これらのイメージング技術が文化財調査において非常に効力を発揮することはもちろんですが、いっぽうで技術の進歩にとともに、それらの機器がブラックボックスとなってしまうことも懸念されます。

そこで、今回の研究集会では保存科学や考古学の研究者による最新の調査の実例だけではなく、機器の開発に携わっておられる技術者の方にも講演いただき、イメージング技術の原理について解説いただくとともに、現行の機器でできること、そして現行機器の限界、問題点についてもご報告いただきました。講演後の総合討議では、計測された画像データの保管と共有化等、その管理と運用方法について新たな問題提起もなされ、学会等が主導してその指針を示すこと等が求められました。

なお、保存科学研究集会で報告された6件の研究報告の概要は、『埋蔵文化財ニュース167号』にてご覧いただけますので、是非ご参照ください。

(埋蔵文化財センター 柳田 明進)



保存科学研究集会の様子